

三重大学とハイデルベルク大学の 日本語教師交換交流について

松岡知津子・高橋 雪絵・中広 美江

On the Teacher Exchange and Cooperation between Mie University and Heidelberg University

MATSUOKA Chizuko, TAKAHASHI Yukie, NAKAHIRO Mie

〈Abstract〉

This report looks at the assessment by Heidelberg University students and faculty of the results of and changes that have occurred over these two years of implementing teacher exchanges between Mie University and the Department of Japanese Studies of Heidelberg University. According to the feedback from faculty and students, the majority of them hold an overall positive attitude about accepting new teachers. Moreover, by leaving behind their long-time familiar workplace and experiencing a different academic environment, the participant teachers themselves were able to objectively change their thinking about teaching principles, methods and systems.

キーワード：教師交換、交流協定大学、アンケート調査、教師の成長

1. はじめに

本稿では、平成 28 年度および平成 29 年度の 4 月 1 日から 9 月 30 日まで行った三重大学とハイデルベルク大学の日本語教師の交換事業について、そして昨年度と今年度の合計 1 年の実施から見てきたもの、教師の成長、それによってもたらされた効果、今後の可能性について検討する。

次節では、まず交換の枠組みと業務内容について確認する。3 節では、両大学の専任教員および日本語非常勤講師へのアンケート結果を、4 節ではハイデルベルク大学生に対するアンケート結果を分析する。そして、5 節では交換プロジェクトの成果、交換教員の成長について述べる。

2. 交換の枠組みと業務内容

平成 28 年度の交換事業同様、平成 29 年度も三重大学の教員は「研究休暇」を、ハイデルベルク大学の教員は「Beurlaubung unter Fortfall des Entgeltes（給与の出ない休暇）」

を利用した。休暇の期間は、それぞれ平成 29 年 4 月 1 日から 9 月 30 日までである。昨年度同様、事前打ち合わせおよび引き継ぎのため、三重大学教員が 3 月中旬に渡独し、ハイデルベルク大学教員が来日する 3 月下旬まで、両校の担当授業および業務内容の詳細について確認した。以下に、授業やそれに付随する業務、管理運営等についてまとめたものを示す。

表 1 交換教員が行った主な業務

	三重大学	ハイデルベルク大学
授業	生活日本語 1 A、集中総合 A、中級 1 文法読解、中級 2 読解作文、上級総合日本語 1 A、日本語日本文化演習 A (週 6 コマ)	現代日本語 2、グループ練習 2、グループ練習 4、現代日本語上級、日本語 E メール の書き方 (週 10 コマ)
授業に付随する業務	<ul style="list-style-type: none"> 日本語教育コースコーディネーター 担当留学生および日本語日本文化研修生の論文指導 	<ul style="list-style-type: none"> 現代日本語 2 コースコーディネーター 成績開示と学習相談
委員会	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流センター運営会議 留学生委員会第一専門委員長 	<ul style="list-style-type: none"> スタッフ会議
学内行事等	<ul style="list-style-type: none"> 留学生研修旅行引率 盆踊り大会のサポート 日本語レベル判定試験追試 文楽鑑賞引率 	<ul style="list-style-type: none"> 全学期生対象の新学期オリエンテーション
その他	<ul style="list-style-type: none"> サバイバル日本語コース 1 (7 回) 教育学部での講演 (1 回) ドイツ人インターンのための通訳 (7 回) 日本国内大学の留学説明会でのハイデルベルク大学留学に関する講演 (1 回) 	<ul style="list-style-type: none"> 三重大学からの学生および教員訪問 (3 件) にかかる打ち合わせ等 日本留学に関する講演 (1 回) ギムナジウム 2 への日本語出張授業 (1 回) 自主制作教科書のモデル会話録音および編集 「日本語を話す会」3 参加 (3 回)

平成 28 年度の業務内容については、松岡・中広 (2017) で述べているが、今回は、前回の業務に加え、新たに挑戦したこともいくつかあった。例えば、両大学教員ともに、任期中に講演を行ったことである。三重大学教員は日本学科の留学希望者に対して「留学のすすめ」と題した講演を、ハイデルベルク大学教員は三重大学教育学部国語科の 1 年生を対象に「ドイツにおける日本語教育と学校制度」についての講演を行った。その他、三重大学教員は 1 年生後期 (2 学期) の現代日本語のコーディネートを行った。また、ハイデルベルク大学在職中に、三重大学教員と連携して、三重大学生の研修プログラム作成や三重大学教員のハイデルベルク大学訪問の補助を行うなどした。

ハイデルベルク大学教員は、今回は三重大学において留学生委員会第一専門委員長を務めたが、第一回目の実施と比較して、会議中にも積極的に発言する機会があった。その他、学内だけにとどまらず、津市内の幼稚園や小中学校にインターンとして来ていたドイツ人学生のための通訳を行ったり、日本国内の大学から依頼を受け、留学説明会でハイデルベルク大学の紹介を行ったりするなどした。

両大学教員ともに、第一回目の実施の際は、交換先の組織と日本語教育事情について学び、日々の日本語教育を行うだけで精一杯であったが、今年度は昨年度の経験を踏まえ、さらに多くのことに携わることができた。

3. 受け入れ機関のスタッフへのアンケート調査

本事業について、受け入れ機関側はどのように評価しているのだろうか。

本節では、メールおよび口頭で行ったアンケート調査の結果をもとに、交換事業を振り返っていく。

3.1. 大学関係者の立場から

3.1.1. 三重大学国際交流センター

まず三重大学国際交流センター長は、大学として faculty exchange という新しい取り組みを行うことができたことが大変良かったと評価している。また、ややもすればマンネリ化してしまう授業内容に、ハイデルベルク大学の教員が新しい風を吹き込んでくれたことが大変ありがたく、慣れない日本の大学での教育活動に楽しみながら参加していただけたことが良かったとのことであった。一方で、より積極的な意見交換を行い、交換教員のドイツでの教育体験を三重大学の授業に反映させるなどのこともできればよかったと述べている。また、継続的な教員交換事業を行うことができればよかったが、今回、2年間だけの短期間のプロジェクトとなってしまったことが悔やまれるとのことであった。今後は、この事業を通じて両大学の交流の促進、とくに相手大学からの留学希望者の増加を期待しているとのことであった。

次に、専任教員からのフィードバックでは、交換教員の人柄や、積極的に業務に携わった点が評価されていることが分かった。例えば、週末に行われたサバイバル日本語コースを担当したことや国際交流センター運営会議における発言などである。会議における発言は、これまで内部教職員だけではうまく解決できなかった清掃に関する問題について言及するもので、これにより解決への新たな道が開けたとのことであった。その他、学内のイベントや留学生との交流に積極的に関わったことも評価された。一方で、以下のような問

題点も指摘した。すなわち、三重大学の専任教師が不在になることで、委員会への出席者を出すことが難しくなったということである。また、留学生委員会への代理出席については、半年間の滞在であるため、理解が難しかった部分があるのではないかと指摘している。同様に、日本語日本文化研修生への指導も難しかったのではないかという意見もあった。これは、ハイデルベルク大学教員がドイツでは論文指導の必要がないため、指導経験不足のためだと考えられる。

3.1.2. ハイデルベルク大学日本学科

ハイデルベルク大学日本学科副学科長は、まず、教職員だけでなく、学生にとっても実り豊かであったと評価した。すでに第一回目の教師交換の際に触れたが、ドイツでの生活が長期にわたる日本語教師がこのような交換の機会を得て日本に行くことが学科にもたらす効果は大きいと考えるとのことであった。というのも、そのことで言語知識を新たにすることができるだけでなく、ドイツに戻ったのち、それを授業に生かすことができると考えるからである。また、多国籍の交換留学生を教えた経験を持つ教員が、ハイデルベルク大学の日本語授業に新たな刺激をもたらしたとしている。ハイデルベルクの学生たちは、教師交換によって変化に富んだ授業を受けられることに感謝するだけでなく、長い目で見てこの変化の恩恵をこうむると述べている。このようなインテンシブでプロフェッショナルな交換事業は、短期の日本滞在ではとてもできるものではなく、このような教師交換を可能にしてくれた三重大学にあらためて感謝したいとのことであった。

3.2. 日本語教員へのアンケート結果から

それでは、実際の教育現場でともにチームティーチングで日本語教育に携わった三重大学およびハイデルベルク大学の日本語非常勤講師は、本交換事業をどのように捉えているのであろうか。以下では、三重大学の日本語非常勤講師 3 名及びハイデルベルク大学の日本語非常勤講師 2 名から得られたフィードバックについて考察する。

3.2.1. 三重大学日本語非常勤講師

三重大学日本語非常勤講師の 3 名については、昨年度もハイデルベルク大からの交換教員と共にチームティーチングを行っており、今回二度目であった。昨年度と同様のコメントとして挙げられたのは、日本語教育への新たな風という点であった。上述したが、ともすればマンネリ化しがちな授業において、新しい教員を迎えることで、学ぶことが多かったとのことである。また、海外からの教員を迎えることで、日本国内における日本語教育

の在り方について振り返る機会となったとのことであった。例えば、日本ならではの日本語に囲まれた教育環境の利点を生かした教育が果たしてどれだけ実践できているかといった振り返りができたとのことであった。

また、前回、教員同士の授業見学ができずに残念だったというコメントがあったが、今回はその反省を生かし、お互いの授業見学ができたことが良かった点として挙げられた。授業見学については、これまでも他の教員の授業見学を希望していたものの、依頼することにためらいがあったが、今回外部の教員であることからお願いしやすかったとのことであった。お互いにフィードバックをし合い、改善点や反省点などを見出すことができたのは、よかったと述べている。その他、昨年度は交換教員との交流の場がなく、必要最低限のやり取りしかできななかったために、今年度はより多くの接点を持つべく食事会や懇親会を開催できたのはよかったとのことであった。そのおかげで、交換教員との交流だけに留まらず、普段は紙媒体の授業日誌とメールでのやり取りだけで顔を合わせる事が少ない他の非常勤講師とも話す良い機会になったとしている。さらに、これまで学内で行事や講演会などがあっても見過ごしたり、そもそもその存在を知らなかったりしたということがあったが、交換教員が学内で開かれる講演会などの情報を回したことで、今回参加できたとしている。

一方で、より深い意見交換ができる場を持ちたかったという意見もあった。上述した通り、昨年度に比べて、食事会や懇親会を通しての交流が増えたものの、日本語教育について深く意見交換をするには至らなかったことが残念だったという意見もあった。また、ハイデルベルク大学で使用されている教材等について少し知る機会があればよかったとのことであった。その他、この交換事業について非常勤講師に対して先だって目的等の説明がなかったことについて残念だという意見もあった。

3.2.2. ハイデルベルク大学非常勤講師

次に、ハイデルベルク大学の非常勤講師からのフィードバックについて述べる。ハイデルベルク大学では、今年二名の日本人非常勤講師とともに業務に携わった。二名の非常勤講師は、交換教員がコーディネートを務める2学期の現代日本語においてチームティーチングを行った。この二名は、少人数制の会話授業である「グループ練習」と「Aktiv-Kanji」と呼ばれる書き漢字のクラスを担当した。また、そのうち一名の講師とは、別のコースのグループ練習（会話クラス）で同じレベルの授業を担当した。

二名から共通して寄せられたフィードバックとして、「新たな視点や気持ちで授業に臨むことができた」という点が挙げられる。具体的には二点挙げられる。一つは、ハイデル

ベルク大学日本語非常勤講師は、専任教員と長く共に働いてきたことから、馴れ合いになってしまいがちだが、三重大学から新しい教員が来たことで気持ちが新たになったということであった。また、もう一つは、ドイツの事情に詳しくない教員が新たに来たことで、これまで当然だと捉えていたことを見つめ直すきっかけになったということであった。例えば、これまで、ドイツ人学習者の外来語の発音については、非常勤教師がドイツ人学習者のくせをよく理解していることから、多少発音が悪くても教師が勝手に補足して「分かったつもりになっていた」とのことであった。しかし、ドイツ人学習者の特徴をよく知らない三重大学教員に指摘され、改めて「日本人に通じる日本語」を教える必要を感じたとのことであった。

一方で、ハイデルベルク大学のこれまでの方針と交換教員の方針が異なる際に、どうすべきか悩むことがあったという。これは、教育現場において、はっきりとした正解が見出しにくく、どちらにも納得できるが故に戸惑うことがあったとのことである。

3.3. アンケート結果から見えてきたこと

以上、両校の専任教員、日本語非常勤講師へのアンケート結果を見てきたが、どちらの大学にとっても、また専任非常勤問わず、交換教員の存在によって新しい風が吹き込まれ、緊張感が生まれたことが分かった。そして、それによりこれまで当然だと考えてきたことを改めて考え直すきっかけを与えたことが良い点として挙げられていることが明らかになった。これは、従来の学生の交換ではなく、日本語教師交換という日本全体で見ても新しい取り組みができたこと、外部の者の視点があるからこそできたことであると考えられる。また、教師交換を1年ではなく2年にわたって実施したからこそ、1年目の反省点を2年目に生かすことができたと考えられる。

一方で、両校の事情について学ぶ、より多くの機会を設けることができれば良かったと感じていることも明らかになった。

4. ハイデルベルク大学学生へのアンケート結果から

夏学期が終了する一週間前から3週間、ムードルによるアンケートを実施した。対象者は現代日本語2の履修者58名と現代日本語4の履修者32名である。ムードルによる任意のアンケートであったため、拘束力はなかった。また、試験期間ということもあって、時期的には最適とは言えず、回答数は少なかった。現代日本語2の授業に参加し、授業へのフィードバックを寄せてくれたのは、18名、現代日本語4では5名であった。

質問は7つあり、ドイツ語で記載した。また、回答もすべてドイツ語であった。以下、

質問の日本語訳を記す。

表2 ハイデルベルク大学で学生に実施したアンケート

- | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>(1) 今学期(2017年夏学期)の日本語授業はどうでしたか。みなさんからのフィードバックをお願いします。</p> <ul style="list-style-type: none">① グループ練習② 漢字の授業③ 文法④ その他 <p>(2) 今学期は、半年間しかおらず、そのためまだドイツ語もドイツ文化についても十分知っているわけではない日本語教師が授業をしました。</p> <ul style="list-style-type: none">⑤ そのため、問題だと感じられた場面はありましたか。⑥ 逆に、よい、あるいは役に立ったと感じた点はありましたか。⑦ ハイデルベルク大学とその交流協定校との言語教師交換についてどう思いますか。 <p>(2016年夏学期：中広－松岡、2017年夏学期：高橋－松岡)</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

ここでは、教師交換に直接関係のある(2)の⑤⑥⑦について言及する。

まず、⑤のドイツ語、ドイツ文化をあまりよく知らない教師が授業をすることで生じた不都合があったかどうかという質問であるが、ほぼ全員がまったく該当しない、あるいはその逆だと答えている。

⑥のドイツ語、ドイツ文化をあまりよく知らない教師が授業をすることでよかったこと、役に立ったことは何かという質問にも、肯定的な意見が多かった。ほとんどのことが日本語で説明されたが、それで問題はなかった、わからないときは日本語で言い換えてもらうことで理解でき、それでもわからない場合は、英語での説明があったということであった。そして何よりも良かったこととして挙げられていたのは、そう簡単にドイツ語に逃げることができなかつたこと、そのため、これまでも増して日本語を使おうとしたことで、日本語によるコミュニケーション力が鍛えられ、運用能力の向上が実感できるようになったということであった。また、学習者である自分たちが、教師である交換教員に、その教師が知らないドイツ語の言葉の意味やドイツ文化について教えられるということに新鮮な喜びを感じたとの記述もあった。

海外における日本語授業の難しさの一つは、学習者のレベルによっては、いくら教師が授業では日本語だけ使おうと決めても、学習項目によっては日本語だけで通すことは非効率であるため、ドイツ語を話せる日本語教師が日本語だけで授業をするということが場合によっては非常に不自然で、学習効果の半減につながる可能性があることである。

ハイデルベルク大学の日本語常勤講師は、いずれもドイツ在住歴が15年から24年と長く、ドイツ人母語話者である学習者の長所や弱点、学習スタイルやストラテジー等につい

て熟知している。2016 年に初めて日本語教師交換を行った際、ハイデルベルク大学の学科長が、一つ懸念されることがあるとすれば、として言及していた「ドイツ語母語話者の日本語学習者の傾向を知り尽くしている日本語教師を日本へ送ることの損失」は杞憂であったことが、今回のアンケート結果を見る限り明確であると言えよう。さらに、日本以外の国で日本語教育を行おうとすると、教師としてその国の言語、教育事情を理解し、学習者のタイプを傾向としてよく把握することは基本であり、大切なことでもあるが、効果的な学習を促すために欠かせない条件ではないことがわかった。そのことは、次の⑧ハイデルベルク大学とその交流協定校との言語教師交換についてどう思うかという問いの回答にも見出すことができる。

この交換事業について、個人的には評価しないという回答者が 1 名、個人的には教員は固定している方が好ましいと回答した学生が 1 名いた以外はすべて、学習者だけでなく、交換教員にも有意義であり、支援されるべきとの評価であった。

教師陣は固定している方がいいと答えた学生は、その理由を本来の常勤講師の授業に慣れているからだとしている。ハイデルベルク大学日本学科の学生は、日本語教師とは入学してから卒業するまでの長い付き合いになり、教師は学生の学習の経過や個人的なことなども把握している。教師陣に変化がないほうが良いと答えた学生にとって、それは大切なことで、そこに安心感を見出していると考えられる。

交換教員がハイデルベルク大学の常勤講師とコンビを組んで 1 学期間授業をしたことをよかったと評価した 22 名の学生は、自分たちが受ける日本語授業をおそらく長い目で見ていると考えられる。教師交換を評価する学生は、長い在籍期間のうちに一度や二度、教師陣に変化があることはむしろ好ましく、日本語の授業が活性化されると捉えており、学生が特定の教師にすっかり慣れてしまうことを防ぐ意味でも良いとしている。特に多かった意見は、教師交換によっていろいろな話し方、いろいろな声が聞け、それが勉強になるというものであった。

ドイツ人学習者を経験としてよく知っているということは、確かに大きなメリットであり、学習者の反応がある程度予測可能であるという点からも、授業運営に大きな不安はない。しかし、学習者側から見た場合はどうであろうか。日本から来た日本語教師というのは、学習者にとって生きた日本語に触れることのできるオーセンティックな存在である。その教師がドイツ語やドイツ文化に慣れていないことはデメリットではなく、却ってそれが故に、その教師と学習者のインターアクションは現実味を帯びる。このことは、先の⑦の回答にもあったように、「教師が知らないドイツ語の言葉の意味やドイツ文化について、学習者が教師に教えられることに新鮮な喜びを感じた」ということにも繋がるであろう。

また、このことは裏を返せば、ハイデルベルク大学で長年日本語教師を務めるハイデルベルク大学教員は、交換教師と同じ日本人ではあるものの、学習者にとっては、安心感はあっても意外性や驚きはなく、いくぶん新鮮みに欠ける存在なのかもしれないと考えることもできる。それを裏付ける意見として、ドイツでの生活が長い日本語教師がたびたび日本で過ごすことで、授業はオーセンティックになると思うという記載と、ドイツでの滞在が長い日本人教師と、普段日本で生活している日本人教師は同じ日本人でも違うという記載があった。後者については、具体的にどんな違いがあるかは述べられていなかったため、それ以上の解釈は残念ながらできない。

ドイツの大学で日本語教師として教鞭をとる者の中には、何らかの理由でもう何年も日本に帰国していないという人もいる。それとは反対に、日本語は生きており変化し続けているから、年に一度は帰国して自分の日本語を見つめなおす機会を持つようにしているという人もいる。平成28年度の第一回教師交換の際、ハイデルベルク大学側の学科長が交換の意義の一つとしてあげていたのが、まさにこのことである。たとえ日本語が母語の日本語教師であっても、そのブラッシュアップは必要であり、それは、休暇中の一時帰国という短期滞在では難しいということである。いくら日本人であっても、日本語のアップデートは不可欠であり、学習者もそれを感じていることを知り得たことは、貴重である。

以上、アンケート結果からは、ほとんどの学習者は教師交換によるデメリットは感じておらず、むしろ歓迎すべきことだと考えていることがわかった。

5. 交換事業の成果

本節では、交換した教員自身の成長と教員および所属機関に現れた様々な変化について述べ、本交換事業がもたらした成果について考察する。

5.1. 交換教員自身の成長

まず、当然のことであるが、それぞれの組織には、それぞれの置かれた立場や状況や環境がある。三重大学国際交流センターには、世界中から様々な目的を持った日本語学習者が集まる。さまざまな学部に所属している正規留学生に加え、半年から1年の短期の滞在となる交換留学生、進学や一定期間の研究を目的とした研究生など異なるステータスの学生が一つの教室で学ぶ。一方、ハイデルベルク大学では、ドイツ人以外の学習者がクラスにすることはあるものの、大半がドイツ人の学生であり、皆ドイツ語という共通語を持つ。また、主専攻・副専攻の違いはあるが、皆日本学を専攻しており、卒業という同じゴールを目指している。このように、一口に「日本語教育」とは言っても、それぞれの背景と目

的等の違いにより、交換教員は戸惑うことも少なくなかったが、すべての経験が学びとなった。例えば、三重大学教員は、ハイデルベルク大学の学生たちと日々接していく中で、彼らが日本に対してどのような思いを描いており、留学に何を期待しているのかなどを感じ取ることができた。また、教室を含むすべての環境が日本でありオーセンティックであるということのありがたみを再認識することとなった。一方、ハイデルベルク大学教員にとっては、送り出したドイツ人学生が、留学先でどのように過ごしているかを知る貴重な機会を得ることとなった。ドイツ人学生は他のアジアからの学生と比べると授業を欠席しがちであるが、学生によると、その原因の一つは三重大学留学中に取得した成績が、ドイツでは認められないからというものであった。ドイツでは、成績互換に関するルールが整備途中の大学も少なくないため、学生は制度という外圧がなく、留学中は自律学習が強られる環境に置かれているということがある。このように、日本に一定期間滞在し、現場に身を置くことでこれまで見えてこなかった問題が見えるようになってきた。留学中の成績の互換に関しては、近年ハイデルベルク大学でも議論されてきたことであるが、今回直接学生の様子を目の当たりにすることにより、今後も考えていく必要があることを再認識した。

また、授業の手法についても学ぶことが多かった。三重大学には各教室に電子黒板が導入されていたため、ハイデルベルク大学教員は、自然にパワーポイントを取り入れた授業ができた。ハイデルベルク大学にはまだそのような環境が整備されていないので、ハイデルベルクではできなかった新しい授業の方法が試せたことも、ハイデルベルク教員にとってプラスになった。一方で、三重大学教員は、限られた機器や日本語環境に身を置くことで、日本における日本語教育の環境がいかに恵まれていたのかを知ることができた。そして、果たしてこれまでにその環境が十分生かされていたのかという振り返りにもつながった。

その他、組織の規模や業務内容の振り返りができたことも大きな成果と言えるだろう。例えば、研究費の有無や使い道、会議のあり方や進め方、留学事務の業務内容や担当部署といった細かなこと一つ一つが交換教員の学びとなった。例えば、三重大学では、授業を行う教員と、留学事務などを行う事務組織が別に存在するが、ハイデルベルク大学では、常勤スタッフ7名の小さな所帯であり、日本語教師は日本語を教える以外にも留学説明会といったイベントマネジメントや留学先の大学との事務的なやり取りといった留学事務の仕事も引き受けている。しかし、協定校の増加により近年ますます増加してきた留学事務等については、今後、予算が許す限り、業務を学生アシスタントの協力を得て行うことが検討され始めた。

5.2. 受け入れ組織に現れた変化

交換して派遣された教員のみならず、受け入れた教員および組織にも得るものは大きかった。それは、交換教師から刺激を受け、それが直接的・間接的に受け入れ教員及び組織に影響を与えたからである。

例えば、三重大学教員は、通常日本で日本語を用いた直説法で多くの授業を行っており、ハイデルベルク大学でも直説法で授業を行った。この点について、多くの学生からは、三重大学教員による説明が理解でき、問題がなかったというフィードバックが得られたが、一部の学生からは、ドイツ語を用いた説明がないために、十分理解できなかったというフィードバックもあった。三重大学教員が日本語だけで不十分だったのではないかと感じた部分は、翌日、ハイデルベルク大学教員がドイツ語で再確認するなどのフォローをした。逆に、ハイデルベルク大学教員が必要以上にドイツ語を使用してしまった場合は、三重大学教員が日本語だけで授業をすることで、全体としては変化もあり、調和の取れた授業となったのではないかと見ている。教師交換は新しいメンバーによるチームティーチングにおいて、お互いの長所を生かし、補い合うことでより効果を発揮したと考えられる。

さらに、両大学の日本語教育部門だけでなく、学部との交流も実現した。まず、三重大学人文学部文化学科とハイデルベルク大学日本学科の協働学習においても交換事業の成果が発揮された。それは、特殊講義「ドイツにおける移民問題と過去の克服」⁴のドイツでのフィールドスタディの一部をハイデルベルク大学で行うというものであった。三重大学からの参加者は7名で、ハイデルベルク大学日本学科からはチューターとして日本語上級レベルの学生3名が参加し、のべ3日間行動を共にした。三重大学の学生にとっては、ドイツにおける難民の問題や学校での歴史教育について日本語の通訳を介して話を聞き、質疑応答や討論をする良い機会になったと同時に、ハイデルベルク大学日本学科の学生にとっても、自国の歴史と難民問題の現状について説明したり意見を述べたりするばかりでなく、日本の歴史教育についても日本語で発表を聞き、日本語で意見交換をするというまたとない貴重な機会となった。ハイデルベルクでの取り組みについては、三重大学人文学部文化学科（ドイツ語）の担当教員と三重大学からの交換教員、平成28年度交換教員として三重大学で教鞭を取ったハイデルベルク大学の日本語教員が、ハイデルベルクにおけるプログラムへの提案やチューターの人選に関与した。これは、交換事業によって両大学の事情をよりよく理解できるようになったことがより良い提案、人選を可能にしたと考える。

次に、ハイデルベルク大学の「日本語 Eメールの書き方」という授業では、三重大学教育学部で国語教育コースおよび日本語教育コースの学生と交流することができた。この授業は相手や状況に応じて適切な表現を用いながら Eメールを書くことを目的としたも

のであるが、これまで授業の課題としてハイデルベルク大学の日本人教員宛てに送っていた E メールを、三重大学教育学部で日本語教育および国語教育を学ぶ学生に送ることで、仮想場面での予行演習ではなく、現実場面での実践を行うことが出来た。ハイデルベルク大生は、授業の Eメールの課題の内 3 回を三重大生に、1 回を三重大学教員に、そして 1 回は三重大学から講師を招いて暑中見舞いはがき作成を行った。参加した学生からは「本当の活動を行うことによって緊張感が生まれてよかった」「はがきを書くことはとても楽しかった。」「本当に大学生とメールで知り合いになれて嬉しかった。」といったフィードバックが得られた。このような、協定大学の授業における交流は、他大学でも行っていると考えられるが、教員交換事業によって内部を知ることにより、より効果的な活動が可能になったと考えられる。また、日本国内にあるハイデルベルク大学オフィスのドイツ人常勤スタッフが平成 29 年 12 月に三重大学の国際交流ウィークの際、三重大学を訪問し、講演などを行うことも実現した。このような人と人との新しい繋がりも、この講師交流事業がなければ実現しないものであったであろう。

これらのことから、今回の教師交換事業は日本語教育にとどまらず、学部を超える形で波及し、教員のみならず学生までもがそれぞれのリソースを活用し合ってお互いに成長できる場を提供するプロジェクトに進化したと言えるのではないだろうか。

教育現場のみならず、交換教員による発言が組織に与えた影響も見られた。例えば、単位付与に関する疑問、教室の掃除についての問題提起、これまで当然のように行ってきた業務についての質問等が、受け入れ大学にとっては改めてその存在意義や重要性について考え直す機会となることも少なくなかった。内部には見えづらい問題が、外部の人間からの指摘によって改めて検討する契機となったのである。このように、お互いの組織について事情を完全に理解していないながらも、交換教員が忌憚なく意見を述べることでできたのは、お互いの教育環境改善への熱意と相互の信頼関係があったからではないだろうか。

日本語教師が、日本語教育の現場で自分の教育理念や教授法について内省する機会は数多くある。しかし、教師といえども、得意、不得意分野を持った一人の人間である。それとは気づかず、偏った考え方をしていたり、ある考えにとらわれていたりすることもあるだろう。勉強会に参加したり、論文を読んだり、研究を通して研鑽を積む努力は誰しもしているであろうが、ルーティンワークをこなすことにエネルギーの大半を費やす日常において、その努力が自分の枠を壊し、視野を大きく開くほどの威力を持っているかということ、そうはなかなか言いにくいのではないだろうか。さらに言うと、気づきというものは、変化を起こすための始めの第一歩でしかない。そこからさらに歩を進めるためには、気づき

を行動につなげ、変化のための実践を展開していかなければならない。半年間にわたる教師交換は、気づきの連鎖を起こすと同時に、変化のためのモチベーションとエネルギーを関係者に与えたと言っても過言ではないと思っている。

6. まとめと今後の展望

平成 28 年および 29 年の 4 月から 9 月までの半年ずつ、合計 1 年間行った教師交換事業の実施にあたり、必ずしも全てにおいて順調だったわけではなく、さまざまな面において犠牲や問題もあった。まず、残された同僚への精神的かつ物理的負担が大幅に増えたことは言うまでもない。その他、宿舎や給与、職務形態といった一つひとつについても検討する必要がある、すべてが手さぐりであった。しかし、関係者および学生へのアンケート結果からも明らかなように、今回の交換事業を評価するフィードバックが多く見られた。交換教員自身も、日ごろの業務を離れて慣れない環境に身を置くことで、本来の業務について見つめなおしたり、周囲に気づきを与えたりすることができたと考える。

以下では、今後に向けて具体的な可能性について 2 点提案したい。

まず一つ目は、三重大学事務職員とハイデルベルク大学教員の短期交換である。ハイデルベルク大学では、大学間協定、学部間協定の別に関係なく、大学管理本部が把握する交換交流協定に基づく留学業務と日本学科が行う留学業務があり、後者のドイツから日本への送り出しに関する事務は日本語常勤講師が中心になって行っている。現在、11 大学への送り出し業務を 2 名で分担している⁵。

ハイデルベルク大学教員が三重大学に勤務した際、ドイツからは見えなかった留学事務の実際を垣間見る機会が持てたことは、送り出し業務を行う上で非常に役に立っている。逆に、三重大学の事務担当者がハイデルベルク大学に来る機会があれば、同様に得るところがあるのではないだろうか。

これまで、ハイデルベルク大学では日本人教員が日本に一時帰国する際、機会を見つけて交流協定校を訪問し、事務担当者や日本語教育担当者と面談することにしてきた。それは、何かあったときに顔を合わせていれば、その後メールでも意思の疎通がしやすく、日本へ送った学生がどんな環境で留学生活を送っているのかもわかるからである。日本の大学の場合、日本人学生の留学先は世界各国に散らばっていることが多く、学生すべての留学先を訪問することは難しいと思われるので、いくつか絞っても良いのではないだろうか。

授業にしても留学にしても、それはシステムが動かすのではなく、人が動かすものである。何事も人間のすることであると考えれば、人と人が直接会うことはすべての基本になると考えられる。そのように考えれば、一対一の交換でなくとも、予算が許すなら、一方

的な研修滞在という形をとってもいいのではないだろうか。

二つ目は、短期間の交流である。長期で交換するためには、入念な準備が必要である。しかし、2年間実施したことで、両校のスケジュールなど把握できており、また日本語教師に関して言えば、本交換事業により、どのような点にそれぞれ困難があるのかという点を把握しているため、短期間の派遣でも十分な成果が得られるのではないだろうか。

筆者らは、教師交換をしたいという小さな希望に大きな可能性を認め、一つのアイデアを実行可能な段階にまで育て、支援し続けてくれた同僚、上司、学習者、すべての関係者に改めて感謝の意を表したい。

実践を阻む理由は限りなくあるが、こういった貴重な経験をしようとする教師が、それぞれの所属する機関においてデメリットを被らないシステムづくりも求められる。今後、三重大学とハイデルベルク大学の教師交換事業に触発され、同様の試みが他の機関で行われるようになれば幸いである。

脚注

注 1 サバイバル日本語コースとは、三重大学の主に平日の授業に来られない人たちで、ゼロ初級の人間向けの日本語コースで、週末を利用して、教えるものである。

注 2 ギムナジウムとは、日本の中高一貫教育に相当する 8 年制の学校で、主に大学進学を目指す者が学ぶ。

注 3 「日本語を話す会」とは、ハイデルベルク市内外に住む日本人の協力を得て毎学期 3 回行っている交流会で、日本語学習には、教室だけでなく実際に日本語を使うことが非常に重要であると考へ、学生には積極的に参加することを勧めている。

注 4 三重大学ウェブシラバス参照のこと。 <http://syllabus.mie-u.ac.jp/>

注 5 11 大学のうち 3 校に関しては International Relations Office と送り出し業務を分担している。

参考文献

松岡知津子・中広美江 (2017) 「日本語教師交換プログラムの実施を通して見えてきたもの—三重大学とハイデルベルク大学における日本語教育の現状と課題—」三重大学国際交流センター紀要 12, pp.149-163

松岡知津子・服部明子 (2017) 「ドイツ人留学生の三重大学への留学動機」三重大学高等教育研究 pp.89-98.

池田朋子・マーク シュロスブリー (2015) 「日・加 E メール交換プロジェクト：初級前半レベルにおけるタンデム学習の可能性」東海大学大学院日本語教育学論集 1 (2) pp.53-70.

謝辞：本事業は、周りの同僚や上司、事務職員といったすべての方々との協力なしには実現し得なかったことであり、心から感謝している。この場を借りてお礼申し上げます。